本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。
著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：
UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2022 村上克尚

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

学術フロンティア講義「30年後の世界へ　「共生」を問う」

文学研究と「ポストクリティーク」

批判は共生のための技術になり得ないのか？

村上克尚（国文・漢文学部会／学際日本文化論コース／言語情報科学専攻）

講義の流れ

０．問題設定

１．「クリティーク」とは何か

２．フェルスキと「ポストクリティーク」

３．文学研究の観点からの「共生」

０．問題設定

・文学理論の時代（20世紀後半～）

＝構造主義、脱構築、精神分析、マルクス主義、フェミニズム、クィア、ポストコロニアリズム、カルチュラル・スタディーズ・・・

・根底にあったのは、クリティーク（批判・批評）の精神

・Rita Felski, *The Limits of Critique* (2015)

＝　クリティークの限界を主張（「共生」が一つの論点に）

１．「クリティーク」とは何か

「クリティーク」

ギリシア語の*krinein*に由来（「分ける」「区別する」「裁く」）

イマヌエル・カント『純粋理性批判　Kritik der reinen Vernunft』（1781）

⇒　自己の拠って立つ基盤について吟味し、その可能性と限界を確定する。（単なる否定や非難ではない）

⇒　マルクス、フロイト、ニーチェ・・・

二つの訳語

「批判」　＝　主に哲学・社会学における「クリティーク」

例）批判理論＝フランクフルト学派

「批評」　＝　主に文学における「クリティーク」

例）批評理論＝文学理論

訳語こそ異なるが、両者は切り離されているわけではない。

文学研究における「クリティーク」の事例

小森陽一「「こころ」を生成する心臓（ハート）」
（『成城国文学』1985年3月→『文体としての物語』）

小森陽一『文体としての物語・増補版』
青弓社、2012年

夏目漱石「こころ」のあらすじ

「私」は、鎌倉の海水浴場で、はじめて「先生」と出会う。「私」は「先生」に惹かれ、帰京後も足しげく自宅を訪れる。「先生」は、「奥さん」と二人で、隠者のように暮らしていた。「私」にも容易に心を開かず、謎かけのような言葉を投げかけるのみである（「上　先生と私」）。大学を卒業した「私」は父を見舞うために帰省する。父がいよいよ危篤になったとき、「先生」から長文の遺書が届く（「中　両親と私」）。学生時代、「先生」は下宿の「お嬢さん」に好意を持っていた。同居していた友人のＫが「お嬢さん」への愛を告白したとき、「先生」は彼を出し抜いて結婚を申し込んでしまう。二人の婚約を知ったＫは自殺する。以来、「先生」は今日まで死んだように生きてきた。しかし、乃木希典が明治天皇に殉死を果たしたという報道に触れ、「先生」も「明治の精神」に殉死することを決めたのだという（「下　先生の遺書」）。

小森の分析

・冒頭の分析

「私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない」

「「私」は一方で「先生」という存在全体に共振し同調し、その生を反復しながら、他方 「先生」が残した「遺書」の書き方に対しては、徹底して差異を強調する。他者に共感することが単なる同化とはならず、むしろ自分と他者との違いを鮮明にすることで、お互いをより本質的な共感へと開いていけることを、 『こゝろ』というテクストは示している」　（小森陽一『文体としての物語・増補版』青弓社、2012年、239頁）

・従来の作品受容の批判

「こうして『心』という〈作品〉は、「倫理」「精神」「死」といった父性的な絶対価値を中心化する、一つの国家的なイデオロギー装置として機能することになってしまったのだった」（同　237頁）

三つの方向への「クリティーク」

１）テクストのなかで見えなくされていた声の葛藤を露わにする

２）読者が共有しているイデオロギーを告発する

３）テクストの読みをより大きな政治・社会体制への批判へとつなげる

⇒　テクストへの批判、読者への批判、政治・社会体制への批判

⇒　自明だと思われている事柄の一つ一つに対して、徹底した懐疑の視線を向け、掘り下げていくこと

２．フェルスキと「ポストクリティーク」

Rita Felski, *The Limits of Critique*

リタ・フェルスキ（1956～） ヴァージニア大学英文科教授

Beyond Feminist Aesthetics: Feminist Literature and Social Change **(1989)**

The Gender of Modernity **(1995)**

Doing Time: Feminist Theory and Postmodern Culture **(2000)**

Literature After Feminism **(2003)**

Uses of Literature **(2008)**

The Limits of Critique **(2015)**

Hooked: Art and Attachment **(2020)**

日本での紹介

『エクリヲ』12号（2020年5月）

【特集　ポストクリティーク　いま批評には何ができるのか】

リタ・フェルスキ「『クリティークの限界』序論」（勝田悠紀訳）

イヴ・コソフスキー・セジウィック「パラノイア的読解と修復的読解、あるいは、とってもパラノイアなあなたのことだからこのエッセイも自分のことだと思ってるでしょ」（岸まどか訳）

ブリュノ・ラトゥール「批判はなぜ力を失ったのか——〈厳然たる事実〉から〈議論を呼ぶ事実〉へ」（伊藤嘉高訳）

クリティークは本質的に共生的なものである

A critique is always a critique of something, a commentary on another argument, idea, or object. Critique does not vaunt its self-sufficiency; it makes no pretense of standing alone. It owes its existence to a prior presence. It could not exist without something to respond to, without another entity to which it reacts. Critique is symbiotic; it does its thinking by responding to the thinking of others.（Rita Felski, The Limits of Critique, The University of Chicago Press, 2015, p.121）

「クリティークとは共生的なものである。それは他者たちの思考に応答することを通じて自らも思考する」

にもかかわらず、クリティークは共生的であることを否認する

While secondary, critique is far from subservient. Rather, it seeks to wrest from a text a different account than it gives of itself. […] Critique ventriloquizes those concealed or counterintuitive meanings that the text is reluctant to own up to. It thereby establishes its sovereignty over the words it deciphers, allowing it to turn a text inside out and to know that text better than it knows itself. (Rita Felski, The Limits of Critique, The University of Chicago Press, 2015, p.122)

「クリティークは二次的ではあるが、従属的であることからは程遠い。むしろ、クリティークは、テクストが与えるのとは異なる説明をテクストからもぎ取ろうと試みる。〔中略〕クリティークは、テクストが白状することを拒む、隠された、直観に反するような意味を腹話術的にテクストに語らせる。それゆえ、クリティークは、解読する言葉に対して主権を確立し、テクストを転覆させ、自分はテクスト以上にテクストについて知っていると豪語する」

「ポストクリティーク」の戦略

クリティーク　＝　①テクストが読者に及ぼす多様な力を軽視する

⇒　政治的に正しいかだけが、作品の価値を定める基準になってしまう

②「より批判的であること」を求める終わりのない運動が続く

⇒　一般読者の読みとはあまりにも遠くかけ離れていってしまう

ポストクリティーク　＝　①アクターネットワーク理論への依拠

②テクストと読者をつなぐ情動（affection）の重視

アクターネットワーク理論

アクターネットワーク理論（ANT）

＝哲学者・人類学者のブリュノ・ラトゥールらが提唱。人間以外の生物やモノや環境も含めて、すべてをアクターとして捉え、それらが形成するネットワークに注目する。

ブリュノ・ラトゥール『社会的なものを組み直す――アクターネットワーク理論入門』伊藤嘉高訳、法政大学出版局、2019年

フェルスキの議論の概要

・いかなるテクストも、批評家が打ち負かすべき対象としてではなく、共に与え合う共同アクター（coactors）として捉えるべき。（さらにそのテクストは、様々な人間、人間以外の生きもの、道具、制度、環境などとネットワークを作っている）。

・その際には、アクター間のつながりを作る要因として、情動を重視すべき。能動的かつ普遍的とされる理性ではなく、受動的かつ特殊的な情動に注目することで、それぞれのネットワークの固有性を抽象化することなく記述できる。

フェルスキの結論

Forswearing suspicion, we are confronted not only with the text but with our implication and entanglement with that text. Aggressivity gives way to receptivity, detachment mingles with an acknowledged attachment, a text's pastness does not trump its evident presentness, and aesthetic pleasures and sociopolitical resonance are intertwined rather than opposed. The aim is no longer to diminish or subtract from the reality of the texts we study but to amplify their reality, as energetic coactors and vital partners in an equal encounter. (Rita Felski, The Limits of Critique, The University of Chicago Press, 2015, p.184-185)

「懐疑〔クリティーク〕と手を切ることで、私たちは、テクストだけでなく、テクストと私たちとの絡み合いやもつれ合いにも直面することになる。攻撃性は受容性に道を譲り、距離を置くことは承認された愛着と混じり合い、テクストの過去はその明白な現在を打ち負かすことなく、美学的な快楽と社会政治的な共鳴とは対立せずに編み合わされる。目指すべきは、もはや私たちが研究するテクストの現実性を減じることではなく、テクストを力に満ちた共同アクター、あるいは対等に出会う生きたパートナーとして、その現実性を増幅することである」

⇒　テクストとの、そしてすべての読者たちとの共生へ

３．文学研究の観点からの「共生」

早稲田大学ハラスメント問題を顧みて

「それからW氏は「村上春樹・河合隼雄・ユングは魔のトライアングル」と言いはじめました。「こいつらは最低のライン」「バカばっかり」。河合隼雄批判に関してはもはや何の中身もありません。大教室の学生たちが笑っていましたが、わたしはまったく笑えなくなって、笑い声があがると下を向きました。わたしは河合隼雄の本を読むことで救われてきましたし、一緒に河合隼雄の勉強会をするようなユング派の方たちとも親しくしていました。わたしは踏み絵をさせられているような気分になりました。たしかに直接的にはわたしの名前は出されていません。でもそれは間接的にわたしやわたしの大切な人がバカだ、無能だ、と言われ続けているようなものでした」（大学のハラスメントを看過しない会「陳述書　第１　囲い込みの始まり」http://dontoverlookharassment.tokyo/2022/06/12）

⇒　「クリティーク」が、他者が生を支えるネットワークを抑圧してしまう事態

保守主義の嫌疑とフェルスキの自己弁護

My conviction […] is that questioning critique is not a shrug of defeat or a hapless capitulation to conservative forces. Rather, it is motivated by a desire to articulate a positive vision for humanistic thought in the face of growing skepticism about its value. Such a vision is sorely needed if we are to make a more compelling case for why the arts and humanities are needed. (Rita Felski, The Limits of Critique, The University of Chicago Press, 2015, p.186)

「クリティークを問いに付すことは、保守的な勢力に敗北し、哀れに降伏したりすることではない、と私は確信している。むしろ、この問いは、人文学の価値に対する懐疑主義が高まるなかで、人文学の思想の肯定的なヴィジョンを表明したいという欲望に動機づけられている。なぜ芸術や人文学が必要なのかという疑問に対して、より説得力のある弁論をするためには、このようなヴィジョンがぜひとも不可欠なのである」

政治における「批判」の忌避

「野党とは特定の政党ではなく、民主政治における機能と役割に還元されるものです。それは汲み尽くせぬ「民意の残余」を政治的に表出するものであり、このような「野党性」が発揮されることで、むしろ民主政治は安定し発展するのです」（吉田徹『「野党」論――何のためにあるのか』ちくま新書、2016年）

→　「野党は批判ばかり」「提案型野党を目指す」

文学における「批評」の衰退

新潮新人賞評論部門　1997～2007年（廃止）

すばるクリティーク賞　2017～2022年（休止）

群像新人評論賞　1958～2022年（休止）

批評から書評へ

・批評・・・長め、独自の考察、作品の限界も指摘

・書評・・・短め、ネタバレや否定的な評価は基本的に禁止

豊﨑由美の炎上事件を事例に

「正直な気持ちを書きます。わたしはTikTokみたいなもんで本を紹介して、そんな杜撰な紹介で本が売れたからって、だからどうしたとしか思いませんね。そんなのは一時の嵐。一時の嵐に翻弄されるのは馬鹿馬鹿しくないですか？　あの人、書評書けるんですか？」（豊﨑由美　https://twitter.com/toyozakishatyou/status/1468943010885152773）

⇒　「既刊本が動くきっかけをつくった点ではすでに実績ベースで書評よりも出版業界に貢献してる」（飯田一史 https://twitter.com/cattower/status/1469418462347145216）、「文字で書く書評より、リーチする潜在的読者の数がはるかに多いので、TikTokで影響力のある書評ができる人のことはたいへんうらやましく思います」（大森望 https://twitter.com/nzm/status/1469293064850374663）

「１．自分の知識や頭の良さをひけらかすために、対象書籍を利用するような「オレ様」書評は品性下劣。２．〔作者への〕贈与としての書評は読者の信頼を失うので自殺行為。３．書評は読者に向かって書かれなければならない」（豊﨑由美『ニッポンの書評』光文社新書、2011年）

まとめ

「ポストクリティーク」は、テクストと読者たち、あるいはそれを取り巻くすべてのアクターが正しく「共生」するためのヴィジョンを模索する。

他方で「共生」の名によるクリティークの相対化は、この社会に浸透している、保守主義、新自由主義の傾向とあまりにも相性が良いことも事実。

「クリティーク」（批判・批評）と「ポストクリティーク」（愛）はともに手をとって進んでいく必要があるのではないか。

参考文献

小森陽一『文体としての物語・増補版』青弓社、2012年

大学のハラスメントを看過しない会「陳述書　第１　囲い込みの始まり」、http://dontoverlookharassment.tokyo/2022/06/12/、参照日：2022年6月23日

豊﨑由美『ニッポンの書評』光文社新書、2011年

廣野由美子『批評理論入門』中公新書、2005年

Rita Felski, *The Limits of Critique*, The University of Chicago Press, 2015〔リタ・フェルスキ「『クリティークの限界』序論」勝田悠紀訳（抄訳）、『エクリヲ』2020年5月〕

吉田徹『「野党」論——何のためにあるのか』ちくま新書、2016年

ブリュノ・ラトゥール『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』伊藤嘉高訳、法政大学出版局、2019年